



電子ジャーナル・データベース認証システムの導入にあたって - 適正利用促進のために -

京都大学図書館機構副機構長・経済学研究科教授 岡田 知弘

近年、電子ジャーナルや各種データベースが整備・拡充されることにより、研究室に居ながら学術情報に直接アクセスできるようになり、研究の利便性は一気に高まりました。ところが、それとともにリスクも大きくなりつつあります。ごく少数の利用者の不適切利用によって、提供機関（出版社）からの情報提供が遮断され、全学規模で長期にわたり利用ができなくなる事態が、度々生じるようになってきています。

周知のように、電子ジャーナルやデータベースの利用にあたっては、提供機関が使用許諾条件を定めており、通常、どの提供機関においても、プログラム等による系統的な短時間での大量ダウンロードやプリントアウト、他者への複製配布・送信、個人利用以外の目的、または研究・教育以外の目的での利用、内容の改変、は禁止されています。

京都大学では、ここ数年、上記に該当する行為が原因で、提供機関による電子ジャーナルやデータベースへのアクセス遮断措置が頻発しています。2003年度から2006年度の夏までの間に27件のアクセス遮断があり、最大24日間も利用できなくなった時があります。

一旦遮断措置がとられると、その解除の要件として当該ジャーナルやデータベースの利用の状況報告とそれに対する再発防止策の報告が求められます。



ところが、その多くはKUINS-III プロキシ経由で接続している機器であり、KUINSの方針により個別利用者の通信記録（ログ）の開示や調査が行えない状況にありました。このため、提供機関への対応が遅れるだけでなく、提供機関が納得できる状況報告にはならず、2～3週間もの長期にわたりアクセス遮断措置を受けることになってしまっています。この結果、多くの利用者の研究に支障を来し、京都大学の学術研究活動全体に著しい不利益を及ぼす事態となっています。また、電子ジャーナル等の契約購読額は、例えばE社の場合、年間4,500万円に達します。1日のアクセス遮断で約12万円、10日間で120万円の経

済的損失を生み出しているのです。場合によっては、提供機関からの損害賠償要求もありえますので、京都大学の財務面での被害も多大なものになるといわざるをえません。

このような事態を放置せず、問題を打開するため、図書館機構では、図書館協議会で慎重かつ十分な審議を行い、情報環境機構の協力のもとにアクセス制御システムを導入する準備を進め、2006年5月6日開催の部局長会議で導入が了承されました。当初、7月3日の試験運用開始を目標に準備を進めていましたが、その過程で情報セキュリティ上の技術的脆弱性が見つかり、運用延期とシステム再構築を決定しました。同時に、システム運用日程を再調整し、年度内に試行を実施して、必要な改善や調整を施したうえで、来年4月から本格運用することとしました。以上の点は、7月21日の図書館協議会で了承を得ました。

導入を予定しているシステムの概要は、次のとおりです。

1. KUINS-III プロキシから特定電子ジャーナル、データベース向けの接続要求を機械的に振分ける。
2. 最初の接続時に、利用記録の取り扱いについて、利用者同意の画面を表示し、同意を求める。
3. 振分けられた接続要求を図書館プロキシで受け、通過させる際に利用登録者か否かの個人認証をおこなう。

4. 個人認証については、情報環境機構の教育用コンピュータシステムの利用コードによる認証とする。

5. 図書館プロキシに利用コードおよび接続先・接続日時を一定期間記録する。

こうして、利用者が電子ジャーナル・データベース利用の際に個々のID及びパスワードを入力することにより、不適切利用に対する抑止効果を高めることができます。また、提供機関によるアクセス遮断が起きた場合には、接続記録を調査することにより、状況調査が迅速に行えることとなります。その結果、提供機関によるアクセス遮断期間を短縮化し、遮断の悪影響を最小限に抑えることが可能となります。

なお、図書館協議会では、新たに認証システム監理特別委員会を設けて、利用記録の管理には万全を期す所存です。状況調査についても厳格な手続きを定めており、調査は接続遮断事象が生じたときのみ実施するものであり、日常的な監視を行うわけではありません。利用者の皆様には安心してご利用いただきたいと思います。

ごく少数の利用者の軽率な行動により、善良な一般利用者のアクセスが制限されるのは非常に残念なことです。認証システムの導入が、そうした事態への抑止力となり、電子情報の活用が一層安全かつ安定的に行えるようになることを期待したいと思います。

(おかだ ともひろ)

(認証システム監理特別委員会委員長)

認証システムのページ

<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/lusr/ninsho.html>

京都大学所蔵の建築図面

- 重要文化財(歴史資料)「ジョサイア・コンドル建築図面」と 「武田五一建築図面」「藤井厚二建築図面」-

京都大学大学院工学研究科建築学専攻助手 岸 泰子

2006年6月、京都大学所蔵「ジョサイア・コンドル建築図面」が重要文化財(歴史資料)に指定された。

ジョサイア・コンドル博士(1852～1920)は、工部大学校(東京大学工学部の前身)で教師として辰野金吾などの多くの建築家の教育に尽力する一方、自ら鹿鳴館や綱町三井倶楽部の設計を手がけるなど、明治期から大正期にかけて日本の近代化に貢献した建築家として有名である。

そのコンドル博士が設計した綱町三井倶楽部のほかニコライ堂(いずれも現存)や独逸大使館、島津邸本館や古河邸本館を含む28件計468枚の建築図面が京都大学に所蔵されている。コンドル博士関係の資料としては日本最大にして最良のコレクションと評されている。図面の種類も平面図、立面図、詳細図など多岐に及び、さらにはコンドル博士のサインが記された図面や、彩色を施した美術的にも価値が高い図面も含まれる。

また、本コレクションに関しては、納入の時期や購入価格(備品としての評価額)、寄付者(納入者)氏名などの資料の来歴が明確である。京都帝国大学工学部建築学教室の記録である『備品監守簿』という当時の備品台帳から、古市公威氏より納入され、大正11年(1922)3月28日付で備品として登録されたことが判明している。工学部建築学教室の創立は大正9年(1920)であり、創立からきわめて早い時期に当教室に納入されていることから、建築教育のための教材として使用する計画があったのではないかと

考えられる。

本コレクションについては、調査報告書や先行研究のなかで目録が作成されていたが、今回、文化庁文化財部美術工芸課のご指導のもと、京都府教育庁文化財保護課、京都市文化市民局文化財部文化財保護課のご協力を得て、京都大学大学院工学研究科建築学専攻建築史学講座の教員や学生も加わり、改めて調査を行った。その結果、明治期の最先端の建造物に関する重要な資料群として文化的・歴史的・美術的価値が高く、大正期から昭和初期にかけての大学における建築学教育の実情を知りうる資料としても価値が高いという再評価をうけた。

また、建築学科・建築学専攻には「ジョサイア・コンドル建築図面」の他にも、歴史資料を含めて様々な建築図面が所蔵されている。ここでは、

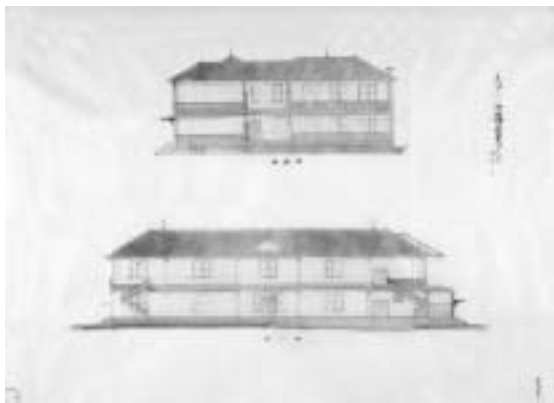


東京復活大聖堂(ニコライ堂)聖堂設計図
立面(背面) / ジョサイア・コンドル建築図面

京都大学建築学科にゆかりの深い資料群について紹介する。

まず、近年、「武田五一建築図面」52点が寄贈された。武田五一は京都帝国大学建築学教室の初代教授であり、1928ビル（旧毎日新聞社京都支社）や京都市役所などゼセッションから表現主義まで幅広い様式を駆使した建築を数多く設計した建築家でもある。京都大学百周年時計台記念館や工学部建築学教室本館も武田の設計によるものである。しかし、武田五一の建築図面は現存するものが少なく、京都大学にも全く残されていない。寄贈者の山口克氏は、御親族が武田と共に仕事をされていた関係から図面を譲られ保管されていたという。京都電鉄五条待合所、同志社女子部教場、京都白河杉本氏別邸、艇庫、第二回家庭博正門、二階家、博覧会陳列館、大阪専修簿記学校に関する平面図や立面図のほか詳細図も含まれる。また、これらの図面には「工学士武田五一設計證」の印があり、製作日付も確認できる点も興味深い。大正期から明治初期の武田の建築活動を知りうる貴重な資料であるといえよう。

さらに、同じく大正期から昭和初期にかけて建築学教室で教鞭をとった藤井厚二の図面「藤井厚二建築図面」も多数所蔵している。写真も



同志社女子部教場新築設計図
立面「武田五一建築図面」

含めて総数948点に及ぶ大コレクションである。藤井厚二は建築環境工学の研究者であるとともに、自ら実験住宅を建設し研究成果を実践した。代表作である聴竹居をはじめ、大山崎の茶室や島津邸に関する図面が多数残されている。また、家具の図面や床の間に関する図面も含まれており、近年では住居学やインテリアデザイン学の分野からも注目を集めているコレクションである。これまで資料の整理が十分に行われなかったため、その全容を把握するには至らなかった。そこで、今回、改めて調査を行い、目録を作成した。

なお、以上の3資料群については、工学研究科建築学専攻建築史学講座が編集した『京都帝国大学工学部建築学教室旧蔵建築教育資料』に目録が所収されている。

このように、京都大学には創立以来蒐集されてきた歴史資料が多数あり、大学の研究教育活動の歴史を知りうる貴重な資料群も多い。また、文献史料だけでなく、特に明治・大正以降の科学・工学史を知る上で必要不可欠な資料も多数所蔵されている点も重要である。

今後は、これらの科学・工学関係の歴史資料にも詳しい専門家の育成が早急な課題といえよう。さらに、建築図面については、法量が一定ではなく保管が難しい上に、色彩が施されているものも多く、図面（資料）の劣化が危惧されている。特に、現在、建築学科図書室に保管されている「ジョサイア・コンドル建築図面」に関しては、文化財として適切な環境が保たれているとは言い難い。湿度や温度、さらには照度などが適切な条件下において保管され、また閲覧にあたっては上記の環境設備の他に十分な広さの場所を確保されることが望ましいという指導を受けている。今後は、これらの環境が改善され、さらに本稿で紹介した資料が研究教育活動において大いに活用されることを望みたい。

（きし やすこ）

<一冊の本シリーズ 4 >

事実に語らせよ

京都大学防災研究所教授 川崎 一朗

冷血

私の学生時代(1960年代後半)、トルーマン・カポーティの「冷血」(龍口直太郎訳、新潮社、1967)がベストセラーになり、一世を風靡した。カンザスの田舎町で起きた一家4人皆殺し事件の犯行から犯人の絞首刑までを追った犯罪小説である。なお、カポーティは「ティファニーで朝食を」の原作者でもある。

「冷血」に影響を受け、佐木隆三は「復讐するは我にあり」を書き、1976年の直木賞を受けた。

「冷血」にも「復讐するは我にあり」にも私は文学としての感興は余り受けなかったが、事実を簡潔な文章でひたすら積み重ねて行くことによって文学としてのメッセージを送り出す「事実に語らせよ」というノンフィクション・ノベルの方法論は、20才を過ぎたばかりの私には新鮮な衝撃であった。

それは、自然科学にとってこそ必要な態度であろう。非常に面白い発見や重要な発見をしたとき、「面白い」や「重要な」という言葉を使わずに、それにまつわる方法や解析経過や小さな事実の相互関連などを淡々と書き連ねることによって、それが面白いことや重要であることを自ずと読み手に理解して貰えるように書きたいものだと思うようになった。

もちろん、自然科学の研究といえども、人間くさく、個性的な存在であることは当然である。ただ、その人間くささや個性を淡々と事実を書き連ねることによって表現してしまうクールさを併せ持ちたいと言う意味であろうか。

「登呂」の記録

あのころ、新幹線の静岡駅を降りて南に歩くと、田圃の中に登呂遺跡があった。「登呂」の記録」

(森豊著、講談社、1969)によると、戦争中の1943年、軍需工場の建設工事によって登呂遺跡が発見された。当時毎日新聞の記者であった著者は戦争中に遺跡を守り抜くことに力を注ぎ、考古学に大きな貢献をした。個人の情熱が何事にも重要であることを学んだ。

現地には高床式の建物の復元物が建っている。誰も見たことがないのに、どうして、高床式であったことが分かるのだろうか? 高床式か低床式かを巡っては、長い間、学会で激しい論争が行われた。その論争にケリを付けたのは、中央に四角い穴が空いた円盤状の板が発見されたからであった。それは鼠返しであることになり、それならば、高床式であるという考えが定着するようになった。「小さくとも急所が全体像を左右する」ことを私は学んだ。

弥生時代は、農業の生産効率も悪く、人口は現在の100分の1のオーダーで、安倍川扇状地の定住人口も数千人を出なかったであろう。そんな頃から鼠と闘っていたのである。

ライシャワーの日本史

1980年代の中頃、「ライシャワーの日本史」(エドウィン・ライシャワー著、国弘正雄訳、文芸春秋)が出版された。ライシャワーは、元アメリカ合衆国駐日大使で元ハーバード大学教授である。この本も余りにも著名で、私などが解説するまでもあるまい。

私が特に興味を感じたのは次の点であった。日本が中国文明をモデルにしたように、北ヨーロッパの国々は地中海文明をモデルにした。ライシャワーは、日本文化と北ヨーロッパの国々の文化を比較し、「日本文化と中国文明の距離」は「北ヨーロッパの国々の文化と地中海文明の

距離」よりずっと大きく、日本は独特の生活様式と独創的な文化を創り出したと述べている。

当時、私は、地方大学の貧弱な研究環境と苦闘していたが、「圧倒的な力を持つ中心文明からの距離」を独創性の物差しとする彼の考え方が、「貧しくともアメリカのキャッチアップ研究はしまい。運が悪くて研究者として干上がってもやむなし。」という覚悟をする背中を押したことは確かである。のちには「京都大学らしさ」を考える参考にもなった。

スロー地震とは何か

振り返ってみると、その時は意識はしていなかったが、若き日の読書がその後の研究者としての在り方を左右したと思えてならない。

この原稿を書くにあたっていくつかの点を確認しようと思って本棚を探したが、思い出深い

多くの本が無くなっている。考えてみると、興味深い本ほど、友人達が持って行ってしまった記憶がある。度重なる引っ越しで行方不明になったものについては再刊本で補っているのだが、自分の心の一部が失われてしまったような喪失感を味わっている。

私事になるが、今年の春、NHKブックスの一冊として「スロー地震とは何か」を世に問うこととなった。私としては、「事実に語らせよ」をはじめとして、これらの読書から学んだことをそれなりに実践したつもりであるが、どれだけ成功したかどうかは自分では冷静には判断できないでいる。

最後に、一冊の本でなく、四冊の本になってしまったことを御容赦頂きたい。

(かわさき いちろう)

「京都大学附属図書館利用規程」改訂

京都大学中期計画にある「開館時間の延長など利便性を高める方策を講ずる」に合わせて、利用者サービスの充実を図るために、以下の5点について規程の改正を行いました。新しい利用規程は、平成18年7月31日より施行しており、下記附属図書館HPから見ていただけます。

<http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/etc/reiki/6-1.pdf>

1. 開館日を拡大することによる改訂（年間の開館日数、302日から339日に37日増）[休館日（第7条）]、以下に示すとおり、休館日は年間63日が26日に減少。
祝日と創立記念日の開館。開館日15日増。
付随して、祝日、創立記念日の開館時間を規程。[開館時間（第六条）]
年度初めの開館準備期間を2日短縮。4月4、5日は開館。開館日2日増。
年末年始の休館日を変更し、冬季休業期間を休館に。休館を3日（12月25、26日、1月5日）短縮。開館日3日増。

夏季休業期間中の土曜日、日曜日、祝日の開館。開館日15日増。

試験期間中の月末休館日（1月、7月）は開館。開館日2日増。

2. メディアコモン設置に伴う「視聴覚資料」の追加 [図書館資料（第2条）]、及び視聴覚資料は貸出ししない資料とすること [貸出ししない図書館資料（第13条）]
3. 「利用者」（第3条）の規程整備。「教職員」を「役員及び職員」に改訂。
4. 入庫検索を学部学生にも認めた [入庫検索（第18条）]、相互利用（サービス）は従来からそうであるが、学内者に限定したサービスであることを明記した [相互利用（第22条）]
5. 「入庫検索時間」（第19条）の規程整備。平日（月から金）と土曜日・日曜日・祝日の二つの開館時間パターンに合わせて入庫検索時間も規定。

（附属図書館情報サービス課）

平成18年度京都大学図書館機構公開事業

テーマ：「発信する学術情報コンテンツ - 京都大学学術情報リポジトリ構築のために - 」

趣旨：

平成17年度は、京都大学における学術情報基盤の充実方策として、電子ジャーナル・データベース等の問題状況に関して全学的な理解を得ることを目的に、キャンパスごと(本部、北部、南部)に討論会を開催した。

今年度は、リポジトリ(電子的な情報発信拠点)に焦点を充て、「発信する学術情報コンテンツ - 京都大学学術情報リポジトリ構築のために - 」をメインテーマとし、京都大学学術情報リポジトリ(公開中)への学内研究者による研究成果登録の促進と広報を目的に、説明会・報告会・討論会を兼ねたシンポジウムを下記の要領で開催する。

構成は、基調講演、システム説明、コンテンツ形成に積極的な部局の事例報告とし、最後に京都大学学術情報リポジトリの今後についての討論会を行う。

主 催：京都大学図書館機構、京都大学学術情報リポジトリ検討委員会

開催期間：平成18年12月20日(水)
14時～17時30分

開催場所：桂キャンパス事務管理棟大会議室

参加対象者：本学の研究者(教員、院生)、図書館職員を中心として、近畿地区の大学の教員、図書館職員の参加も歓迎する。

Grosz - Malik - Brecht : 京都大学附属図書館蔵 ワイマール共和国時代文献コレクション展示企画展

京都大学は600万冊を超える蔵書を有しているが、そのうち附属図書館は約87万冊の図書館資料を所蔵している。中でも、20種近くある特殊コレクションには貴重資料も多く、これまで機会を捉えて一般に広く公開する事業を毎年実施してきた。

今回は平成17年6月より開始した常設展示「附属図書館セレクション」を展示の場として、一つのコレクションを4回のシリーズで展示して資料紹介を試みることにした。テーマを絞り込んだ少し長期にわたる連続した企画である。

対象としたコレクションは、昭和58年度に文部省より配分された予算で購入した大型コレクション「ワイマール共和国時代文献コレクション」とした。

このシリーズ展示では、以下のようなテーマおよび日程で連続展示を行う。

第1期「マリク出版のイラストレータ Georg Grosz の風刺画」

展示期間：平成18年11月1日(水)
～12月26日(火)

第2期「マリク出版創始者 John Heartfield の作った図書や雑誌」

展示期間：平成19年1月5日(金)
～2月5日(月)

第3期「革命ロシア文学とマリク出版の図書」

展示期間：平成19年2月7日(水)
～3月29日(木)

第4期「世紀の劇作家 Bertolt Brecht の初版本」

展示期間：平成19年4月4日(水)
～5月30日(水)

よくある質問と回答(FAQ)第2回

利用編

Q. 附属図書館の開館日を増やしてほしい。

A. 附属図書館では、開館日数と開館時間の拡充を検討した結果、平成 18 年度から試行的に開館日数を拡大しています。

平成 18 年度開館日数の拡大(試行)

夏季休業中の土・日・祝日

開館(16日増)(通常の土・日・祝日と同じく10時から17時まで開館)

図書整備等のための休館

冬季休業期間 12月25、26日と1月5日は開館する(3日増)

年度当初 4月4日～5日は開館する(2日)

毎月月末 試験期間中(7月、1月)は開館する(2日増)

23日開館日を拡大(平成18年度)

Q. 附属図書館のOSLは平日しか利用できません。これを、土日も開放できませんか？

A. 土曜・日曜・祝日について、平成18年2月24日(土)から下記の要領で3階情報端末室の一部を試行開室いたしました。

開室する日時：土・日・祝日の開館日

10時～16時30分(開館時刻から閉館時刻の30分前まで)

開室する部屋：附属図書館3階(北側)情報端末室1 PC50台設置

開室条件：室内のOSL機器はいずれも学術情報メディアセンター所有のため、これら土日祝日の運用方針は下記の通り学術情報メディアセンターの土曜日の提供方針に準じます。

- (1) プリンターは、使用を停止します。
- (2) 障害やトラブル等に対応しません。
- (3) TAは配置しません。

その他：情報端末室1では、持ち込みPCを学内LANに接続できます。

備考：利用実態を見て、西側の情報端末室2(PC30台)の追加開室も考慮します。

資料編

Q. 学生購入希望図書で「絶版品切れ」で購入不可と回答のある図書を古書店等で購入してほしい。

A. 学生購入希望図書については、授業やレポート作成などの目的など当面の利用のために希望される場合と、当館の蔵書の体系的整備の観点から欠けているとして購入を求める場合とに分かれます。(両方を兼ねる場合もあります)。

前者の場合の古書は、他大学等から一時的に借用する(相互貸借)ことで目的を達することができます。国内での所蔵先は、NACSIS Webcat¹⁾やWebcat Plus²⁾で検索可能です。国内に所蔵が無い場合には、海外の図書館からの借用も可能な場合があります(一般に、やや時間を要します)。附属図書館の場合には、1階の相互利用カウンターにご相談ください。相互貸借を受け付けている部局図書館もあります³⁾ので、身近な図書館・室をご利用ください。

なお後者のように、当館の蔵書として必要であると判断した図書は継続的に探して購入いたしますので、希望理由にその旨をご記入ください。

1) NACSIS Webcat

<http://webcat.nii.ac.jp/>

2) Webcat Plus

<http://webcatplus.nii.ac.jp/>

3) 学内図書館・室のサービス一覧

<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/>

[modules/libraries/index-j.html](http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/libraries/index-j.html)

「附属図書館の24時間開館が 困難なことについて」

附属図書館の24時間開館については、総長と学生とのキャンパスミーティング^{注1)}や「学生生活実態調査報告(自由記述)」^{注2)}などで要望されておりますが、24時間開館が実施困難であるため、理由を説明致します。

現在の附属図書館の建物は1983年に竣工しましたが、24時間開館を念頭において設計されておられません。

現在の施設を使用して24時間開館を実現する上での問題点を把握するために改めて館内を点検したところ、利用者の安全性確保、利用者スペースと業務スペースの調整、空調設備の合理的運用等の点から防犯・防火や快適さを考慮すると、施設の大幅な改修が必要になることが判明しました。また、安全な運営のためには24時間の人員配置および経費の確保も不可欠です。

所要経費を推算したところ、1階から3階ま

でを開放した場合で、改修経費は約500万円ですが、年間の維持経費として人件費と光熱水料で約5,380万円が新たに発生することが分かっています(仮に1階のみ開放としても、施設改修に約3,000万円、年間の維持経費は約2,500万円が見込まれます)。

このようなデータ等を踏まえて、図書館協議会、役員懇談会で議論していただいたところ、附属図書館の24時間開館は実施困難であることが了承されています。

多くの意見では、ご希望のいわゆる時間外の学習のためには、図書館の蔵書を必要としないとの意向が強いと言われておりますから、当該学習スペースの確保については、図書館以外に教室の開放なり、遊休施設の利用の他、新たな施設設置の際に考慮するなどの方法も考えられると思います。

参考までに、海外や国内の主要大学の中央図書館について調査した結果を示します。ただし、網羅的な調査ではありません。

注1) http://www.kyoto-u.ac.jp/notice/05_notice/ippan/051109.htm

2) http://www.kyoto-u.ac.jp/student/04_zitai/houkoku.htm

海外の主要な大学、および国内の同規模大学の開館時間

1. 海外の主要大学

(曜日によって開館時間を短縮する大学がある)

大 学	国	主たる開館時間
ケンブリッジ大学	英国	9時～19時15分(一部22時まで)
メルボルン大学	豪州	8時30分～22時(一部23時まで)
カリフォルニア大学 (バークレイ)	米国	8時～21時
カリフォルニア大学 (ロサンゼルス)	米国	9時～17時
ソウル大学校	韓国	6時～23時(一部24時間開館)
延世大学校	韓国	6時～23時(一部24時間開館)
精華大学	中国	7時30分～22時30分
北京大学	中国	6時30分～22時30分

2. 国内主要大学

大 学	平 日	休 日
北海道大学	8時30分～22時	9時30分～17時
東 北 大 学	9時～21時	10時～17時
東 京 大 学	8時30分～22時30分	9時～19時
名古屋大学	8時45分～22時	10時～17時
大 阪 大 学	9時～21時	10時～17時
九 州 大 学	9時～22時	10時30分～18時

附属図書館利用統計 (平成17年度)

入館利用状況

1. 年間入館者総数

770,561人

内 訳

学 内	入 館 機	755,350	(人)
	マニュアル*	4,486	
学 外	閲 覧**	9,770	
	見 学	955	

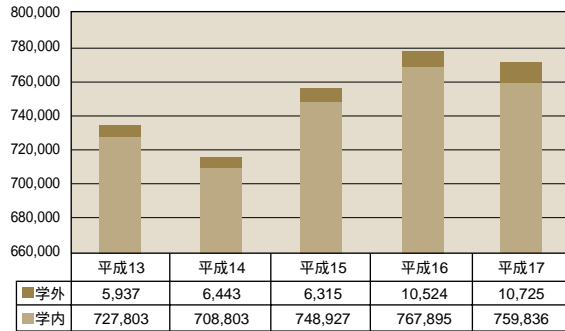
* マニュアル：忘れたり、紛失等による利用証不携帯の入館者
** 閲覧：学外者の特別閲覧願手続きによる入館者

入館機による入館者 755,350人について

開館日 1日当たり	2,383	(人)
平 日 1日当たり	2,964	
土・日曜日1日当たり	916	
1日の最多入館者数*	6,358	

*平成17年7月19日

2. 入館者総数5年間推移



利用対象者数

1. 登録者総数

34,950人 (平成18年5月1日現在)

内 訳

教 員	3,391人
院 生	9,780人
学 生	13,308人
職 員	3,146人
そ の 他	5,325人

教員には非常勤講師、共同研究者等を含む。
院生には大学院聴講生、研修員等を含む。
学生には学部聴講生等を含む。
職員には非常勤職員を含む。
その他には卒業生その他を含む。

2. 利用証発行枚数(平成17年度)

2,343枚

内 訳

新規交付	2,296枚
再 交 付	47枚

(うち放送大学生は496枚)
(再交付とは、紛失・有効期限切れ・転部・改姓等をいう)

資料利用状況

1. 普通図書貸出利用

年間利用冊数 146,213冊

年間利用人数 77,679人

2. 学内者への貸出

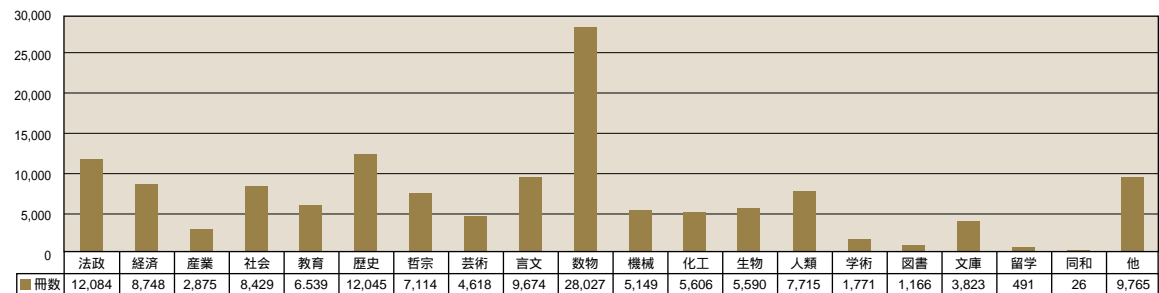
	平成17年度	平成16年度
年間貸出冊数	141,255冊	142,842冊
年間貸出人数	75,783人	76,974人
1日平均貸出冊数	446冊	459冊
1人当たり貸出冊数	1.9冊	1.8冊
年間貸出冊数最高日	1月12日(1,053冊)	12月24日(1,244冊)

4. 貴重書利用

貴重書(特殊文庫)閲覧上位リスト

1	河 合 文 庫	267冊
2	和 貴 重 書	167冊
3	富 士 川 文 庫	155冊
4	菊 亭 文 庫	130冊
5	谷 村 文 庫	67冊

3. 分類別貸出の内訳



参考業務

文献調査 < 国内 >

1. 受付件数

		平成17年度(件)	平成16年度(件)
内容	所蔵調査	5,165	5,505
	事項調査	1,077	895
	その他	3,830	3,949
	合計	10,012	10,349
形式	FAX(文書を含む)	1,316	1,575
	電話	16	3,814
	カウンター	3,036	4,960
	合計	10,012	10,349

2. 依頼件数

		平成17年度(件)	平成16年度(件)
内容	所蔵調査	164	139
	事項調査	78	59
	合計	242	198
形式	FAX(文書を含む)	242	198

3. 受付・依頼件数合計における学内者・学外者別利用件数

	平成17年度(件)	平成16年度(件)
学内者	5,201	5,781
学外者	5,053	4,766
合計	10,254	10,547

4. FAX・文書による受付・依頼の機関別件数

機関名	受付件数(件)	依頼件数(件)
学内	25	23
国立大学	221	47
公立大学	55	2
私立大学	703	42
国立共同利用機関	10	0
公共図書館等	18	8
非営利団体	18	10
一般企業	10	0
個人	272	0
国立国会図書館	0	0
合計	1,332	132

< 国外 >

受付件数

平成17年度	平成16年度
9件	15件

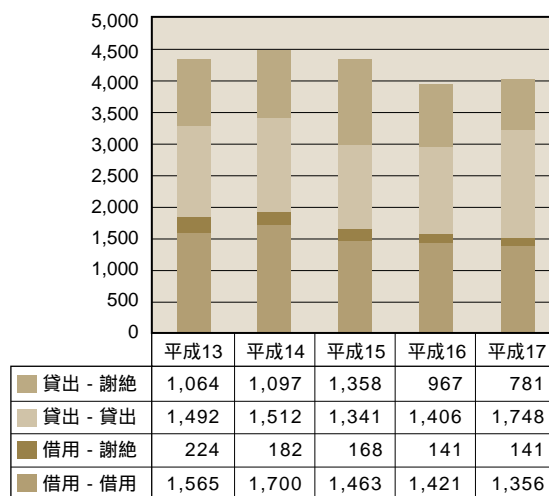
相互利用

1. 他大学図書館訪問利用

	平成17年度(件)	平成16年度(件)
発行件数	997	960
受付件数		

2. 現物貸借

現物貸借5年間推移



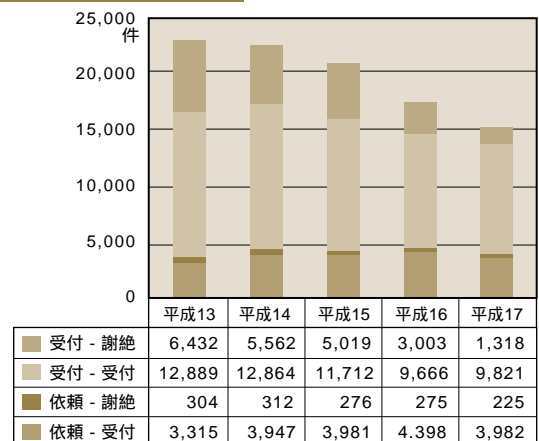
3. 文献複写

	平成17年度(件)	平成16年度(件)
依頼	5,517	5,778
受付	12,664	14,774
合計	18,181	20,552

内訳

	国外	国内	学内	合計
依頼	247	4,207	1,063	5,517
受付	155	11,149	1,360	12,664
合計	402	15,356	2,423	18,181

文献複写(国内)5年間推移



図書館の動き

平成18年

- | | |
|--|--|
| <p>9月13日 7th Fundamentals Seminar「図書館職員のための接遇マナー」</p> <p>19日 京都大学シニアキャンパス2006・図書館開放（～22日）</p> <p>21日 大学図書館近畿イニシアティブ運営委員会（第2回）（京都大学）</p> <p>27日 図書系連絡会議
セキュリティ講習会</p> <p>28日 国立七大学附属図書館協議会（大阪大学）</p> <p>30日 京都大学ジュニアキャンパス2006・図書館開放（～10月1日）</p> <p>10月5日 留学生対象図書館オリエンテーション</p> <p>6日 京都大学図書館協議会第一特別委員会（情報資源）（平成18年度第2回）</p> <p>10日 京都大学図書館機構平成18年度第1回講演会「目録／目録規則の動向と将来像」</p> <p>17日 平成18年度大学図書館職員講習会（京都大学）（～20日）</p> <p>24日 図書系連絡会議</p> <p>25日 京都大学図書館協議会第一特別委員会（情報資源）（平成18年度第3回）</p> <p>26日 国立大学図書館協会理事会（東北大学）</p> | <p>実務サポート研修「図書書誌作成の注意点と目録情報の品質管理」</p> <p>31日 京都大学図書館協議会幹事会（平成18年度第3回）</p> <p>11月1日 Grosz - Malik - Brecht: 京都大学附属図書館蔵
ワイマール共和国時代文献コレクション展示企画展（～平成19年5月30日）</p> <p>2日 京都大学図書館協議会（平成18年度第3回）</p> <p>7日 第61回国公立大学図書館協力委員会（東京大学）</p> <p>8日 京都大学図書館機構平成18年度第2回講演会「保存の科学と書庫環境」</p> <p>14日 京都大学図書館協議会第二特別委員会（図書館サービス）（平成18年度第2回）</p> <p>21日 平成18年度大学図書館近畿イニシアティブ初任者研修会（関西大学）（～22日）</p> <p>京都大学「京セラ文庫『英国議会資料』」開設式</p> <p>22日 図書系連絡会議
図書館将来構想企画検討会中間報告会</p> <p>24日 実務サポート研修「革装幀本を和紙で治す」</p> |
|--|--|

目 次

電子ジャーナル・データベース認証システムの導入にあたって	岡田 知弘 ... 1
京都大学所蔵の建築図面	岸 泰子 ... 3
事実に語らせよ<一冊の本シリーズ 4>	川崎 一朗 ... 5
「京都大学附属図書館利用規程」改訂	6
平成18年度京都大学図書館機構公開事業	7
Grosz - Malik - Brecht : 京都大学附属図書館蔵 ワイマール共和国時代文献コレクション展示企画展	7
よくある質問と回答(FAQ)	8
（「附属図書館の24時間開館が困難なことについて」）	
附属図書館利用統計（平成17年度）	10
図書館の動き	12

編集後記

「ネットワークで提供するサービス」について、たくさんの課題があります。京都大学図書館機構発足以降、「静脩」はその課題を一つ一つ取り上げてきました。前号では「機関リポジトリ」、今号では「電子ジャーナル等の認証システム」。まだまだ、課題はたくさんあります。これからも、一つ一つ取り上げて、解決の道を模索したいと思います。（T）